

「携帯するジビエ」で里山保全 ～猪鹿した獣肉ジャーキープロジェクト～

The Initiative of Conservation Village-Vicinity Mountain
that Used the Jerky Made from Boar Meat and Venison.

岐阜大学 地域システム計画研究室 石田大貴 原田剛志 宮地翔 大野沙知子
工学部 川口直秀 地域科学部 鶴岡柚見

■講義「地域活性化システム論」とは？

内閣府が推進している、地域活性化の一役を担う人材を養成する内閣府が推進している講義である。岐阜大学のほか、全国28大学(平成22年度時点)で開講している。この講義の特色は、地域のニーズに即した実践的なテーマを大学独自の視点から想定し、学生自ら具体的なアクションプランを策定していくところにある。現場のニーズに即した具体的なアクションプランの作成を通じて、地域力向上をね

◆岐阜大学「地域活性化システム論」のねらい

地域活性化の先進事例を知り、現場で活躍する講師からスキルを学ぶことによって、地域活性化・まちづくりを実施していく際の中心的な役割を果たす人材を養成することをねらいとしている。

～講義計画～

1. 先進事例を学ぶ

地場産業を活かした活動や地域特有の課題を発掘し、地域復興に活用できる支援事業など地域に根付いた取り組みを実践している方を講師として招いている。受講生は、地域活性化・まちづくりの事例紹介やその課題について学ぶ。

～講義内容一覧(2011年度)～

- ・全国の地域再生・活性化事業の事例【工学部社会益工学科 高木明義】
- ・国の地域再生・活性化の取り組み、地域活性化システム論の趣旨・意図【内閣府参事官補佐】
- ・現役女子大生によるカフェ開業【アルカカフェ店長】
- ・知的障がい者向け施設と授産商品販売所「ねこの約束」【第2いぶき作業所所長】
- ・インターンシップを通じた地域活性化【NPO法人G-net代表】
- ・グループワーク・ワークショップのコツ【高木明義】
- ・プロデュース(企画)力を磨こう【社地域問題研究所】
- ・地域活性化に向けて～岐阜県の取組と岐阜県内の事例～【岐阜県総合企画部観光交流推進局長】
- ・地域活性化におけるソーシャルビジネス【NPO法人G-net代表】
- ・岐阜県開市のまちおこしがミッション:フリーペーパーと地場産業支援【NPO法人ぶーめらん代表理事】
- ・郡上市における自然体験プログラムと里山保全活動【NPO法人メタセコイアの森の仲間たち代表理事】
- ・中国人留学生の就業支援とグローバル人材採用・育成【株式会社Keisei代表】

2. グループ演習「まちづくりのための地域資源を探そう」

地域でソーシャルビジネスに取り組む企業が抱えている課題を題材にして、「自分たちなら何ができるか」を考え、【地域活性化事業計画書】を作成する。



地域活性化事業計画書

～課題内容(2011年度)～

- ・フリーペーパーと地場産業支援【NPO法人 せき・まちづくりNPOぶうめらん】
- ・自然体験プログラムと里山保全活動【NPO法人 メタセコイアの森の仲間たち】
- ・グローバルな人材採用・育成【株式会社 Keisei】



グループ演習の様子

受講者は、上記の3事業の課題にそれぞれグループ分けし、事業計画を策定した。本プロジェクトは、NPO法人「メタセコイアの森の仲間たち」から出題された課題から考案されたアイデアを具現化した。

■プロジェクトの背景

課題 『郡上産獣肉(猪・鹿肉)の販路拡大』

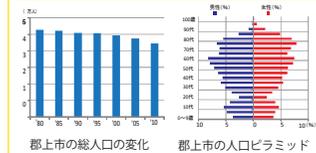
by NPO法人メタセコイアの森の仲間たち

■郡上地域の現状と課題

郡上市は、岐阜県の中央部に位置しており、面積の90%以上を森林が占める中山間地域である。現在、深刻な獣害に悩まされている。

■郡上市の人口減少と高齢化

人口は年々減り続けている。人口ピラミッドを見ると高齢化が今後ますます深刻になることがわかる。猟師人口の減少の原因の1つと考えられる。



■猟師だけでは生活できない

近年、防寒具としての毛皮の需要が減少し、捕えた獣によって生計を立てることが難しくなった。個体数管理の観点から猟期は限られており、安定供給には課題がある。

獣肉は、モモやロース以外の部位は、ほとんど利用されておらず価格の相場が高い。また、捕獲した獣を食用の肉として販売する仕組みは整っておらず、捕えた獣は廃却・埋設処分されている。これらの理由により、猟師の仕事だけでは、生活することができない状況にある。

■注目のアイデア



牛に出せない猪鹿した味
『携帯するジビエ』
獣肉ジャーキーを岐大ブランドとして商品化

「携帯するジビエ」のコンセプトは、携帯電話のようにどこへも持ち運べて、学生でも手軽に手に取ることができる商品である。一般にジビエ料理は高価なものとして認識されているが、ジャーキーとして商品化すれば「おつまみ」感覚で親しみ易い。このほか、供給不安定な獣肉においても、長期保存が可能であり消費者に安定供給できる可能性がある。また、少量の細切れ肉で加工できるため獣肉を有効できる。岐大ブランド商品として販売することで、話題性あるお土産として、学生や教職員を通じて、飲食会や大学行事の一品として、あるいは帰省時のお土産として、広く地域に浸透させることが期待できる。

ジビエ: ヨーロッパを中心に高級食材として知られ、猟師によって、食材として捕獲された野生の鳥獣のこと。

私たちのプロジェクトは、岐阜大学の講義である地域活性化システム論の取り組みの中で誕生したアイデアから始まった。その取り組みとは、受講生が地域活性化・まちづくりの事例を学び、与えられた課題に対して、「自分たちなら何ができるか」について、事業計画を作成するものである。「獣肉ジャーキー」の提案は、課題の一つ「郡上産獣肉(猪・鹿肉)の販路拡大」から考案された。

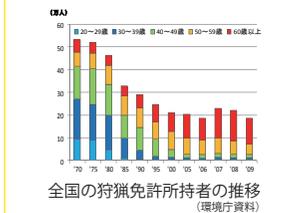
■里山の保全と猟師と現状

猟師には野生動物に「捕獲王」をかけることにより、野生動物の活動を抑える働きがある。十数年前までは、個体数の管理に一定の役割を果たしてきた。近年の里山では、暖冬・少雪化により野生動物の生息分布が拡大しており、個体数も増加傾向にある。一方、農家の高齢化や農村の過疎化によって、耕作放棄地が増加し、野生動物にとって溜みやすい環境になりつつある。猟師の人口は減少傾向にあり、高齢化が深刻となり、十分な「捕獲王」をかけられる状況ではない。

■猟師人口の減少と猟師の高齢化



郡上の猟師の年齢
(メタセコイアの森の仲間たち調べ)



全国の猟師免許所持者の推移
(環境庁資料)

■後継者問題の背景

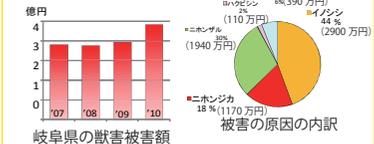
猟師を就職先として選べる環境ではない。猟師としての収入源の確保が重要な課題といえる。

■深刻な獣害

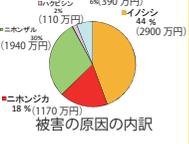
岐阜県の4.8億円の被害(2010年)のうち41%(約2億円)が郡上の属する中濃地域で発生している。郡上では6225万円の被害が出ており、赤色の部分の約30%にあたる被害が出ている。獣害のうちで最も多いものは猪による被害である。猪や狼は農作物を食べる。また、鹿は樹木を食べるため林業にも影響を与える。



被害地域の内訳(2010)



岐阜県の獣害被害額



被害の原因の内訳

■里山を保全するための長期的な課題

獣害の被害を減少させるために、追い払いや捕獲が必要である。このため、その担い手となる猟師の人口を増やす必要がある。そのためには、里山を守る仕事を広く周知することに合せて、猟師の収入を増やすことで、就職先に猟師を選ぶ人を確保する必要がある。

■授業で連携しているNPO法人 メタセコイアの森の仲間たち

地域が活性化するためには、地域の現状や可能性を分析した上で、その地域に合ったものを作成していく、アレンジしていく必要がある。地域活性化の担い手となる学生にとって、現実の課題に取り組んだ経験は貴重な財産といえる。「地域活性化システム論」のグループ演習の課題の一つとして、岐阜県郡上で生じている実際の問題が取り上げられた。

活動理念
ずっと暮らし続けられる郡上をつくる。

■郡上の魅力を伝える



郡上の自然や食育をテーマとした自然体験プログラムを通して、小中学校の野外教育に携わるとともに、「どろんこパレード」や郡上体験ツアーなどを通じて、郡上地域の魅力を伝える。

■里山を守る

山保全組織「猪鹿庁」を組織し、罠による野生動物の捕獲、防護柵の設置などの獣害対策や、雑木林の刈り払いなどの生息環境の管理を行っている。



■獣害被害の減少



野生動物の捕獲を通して、獣害の減少を目指している。農家からの連絡を受け、出動することもある。7人うち4人が狩猟免許(罠)を取得するなど、郡上地域の課題に対して、積極的に取り組んでいる。さらに猟銃の免許の取得を目指し、ベテラン猟師から学んでいる。

■猟師と獣害を知ってもらう取り組み



猟師と交流し、狩猟の見学や猟師体験、獣肉の調理を体験できるツアーが定期的に開催されている。猟師は里山の保全者という役割を担っている。広く一般に猟師の存在意義を知ってもらい、猟師として働く環境を整える取り組みを進めている。獣害問題を知ってもらうだけでなく、獣肉を食べることが里山保全に繋がることが広く知ってもらうことを目指している。

■猟師への就職環境を整える取り組み



獣肉の販路拡大を通して猟師の所得向上を狙い、猟師人口の増加を目指している。野菜炒め「猪鹿ちゃん」や「猪骨ラーメン」など獣肉を使った料理を提案している。郡上産獣肉が売れる環境を整えば、猟師減少に歯止めをかけるキッカケとならざる。

課題 『郡上産獣肉(猪・鹿肉)の販路拡大』

獣肉加工施設を作ったが、売先が少なく在庫が余っている。獣肉は安定供給・品質の安定が難しい。さらに市場にはあまり出回らないため、価格の相場は高い。まずは毎年獲れる獣肉を単価を下げずにどう売っていくか。できればエコツアーや地場野菜とセットで売りたい。

■ 獣肉ジャーキー商品化 project

提案のコンセプト

本プロジェクトは、「地域活性化システム論」講義内グループ演習において発案された「獣肉ジャーキーを岐阜ブランドとして商品化」を基に、その実現を「NPO 法人メタセコイアの森の仲間たち」と協働で目指したものである。

メタ森は郡上市における獣害被害、獣害駆除を行ってきた猟師の高齢化、狩猟しても処理される獣肉などについて問題提起している。その現状の問題に対して、「猪や鹿の肉のようなジビエを、レストランに食べに行くような高級で手の届かない存在ではなく、携帯電話のように持ち運べて、学生でも手軽に手に取れ、どこでも食べられる商品として考えてもらいたい。」という発案者である学生の想い、「獣害被害、猟師の高齢化などの郡上市の現状を伝える情報発信のツール、高齢化する猟師問題に対して資源を有効活用することによる猟師の認知度向上」を目的としたメタ森の両者の考えをもって商品開発を進めてきた。

本プロジェクトは、普段見慣れない**獣肉を普段見慣れている「ジャーキー」という形で商品化**することによって、これまで里山保全、獣害被害などの問題と関わりのなかった人々に対して**里山に興味をもってもらうこと**、また獣肉において従来廃棄されていた「スネ肉」という資源を有効活用することによって**猟師の所得を向上させ、猟師人口の増加を促進させるための仕組みづくりの一助**となることを目的とした取り組みである。

里山保全における課題

- 増加する深刻な獣害被害
- 獣害駆除を行ってきた猟師の高齢化



- 林業、農業従事者の高齢化
- 捕獲しても処理される獣肉



解決策: 獣肉ジャーキー



ジャーキーは世代を問わず身近な食品であるため、多様な人々に手に取ってもらえる可能性を秘めている。従来、廃棄されていた「スネ肉」を有効活用できるため、猟師の所得の増加に繋がる。獣害問題や猟師の里山における意義などの情報発信のツールとして活用できる。話題となることで、獣害問題が広く認知されることになる。

期待される効果

- 資源の有効活用
- 猟師の所得増加 ⇒ 猟師人口の増加



- 持続的な里山保全
- 情報発信ツール



■ これまでの実績

本プロジェクトは、里山保全活動に通じる獣害対策の一環として、獣肉ジャーキーを用いて以下の取り組みを行った。

◆ 実現化までのプロセス

月に2回のミーティングが開かれ、学生とNPO 法人メタセコイアの森の仲間たち（通称メタ森）とで商品化やプロモーションについて話し合った。今後の方向性や役割分担、年度内に行うことを整理した。学生はジャーキーの利用シーンを考えること、メタ森はパッケージの案を複数案考えることを分担した。

◆ 大学祭における試食会及びアンケート調査の実施

1. 試食会内容

2011年11月5日、6日に岐阜大学で行われた大学祭において、ジャーキーの試食会を企画した。本校の大学祭は、学生による模擬店だけではなく、地域の住民によるフリーマーケットの店舗が軒を連ねるなど多くの人々が訪れるイベントである。この機会を利用して、プロジェクトの認知度向上を図った。獣肉ジャーキーの活用シーン（食べ方）に関するアンケート調査を実施した。試食会当日は多くの人々が訪れ、猪肉、鹿肉と普段見慣れない獣肉に興味が集まった。

2. アンケート調査結果

アンケートの結果として、104人から回答を得た。獣肉ジャーキーの新たな食べ方を発見し、獣肉ジャーキーに対する素直な感想を聞くことができた。アンケート結果の多くは、「とてもおいしかった」、「商品化したら買いたい」など感想が記入されており、学生だけでなく、訪れた子供連れの親子に好評であった。しかしながら、試食を断る人も多く、**獣肉に対する偏見も多く見られた**。今後獣肉の認知度を向上させていくとともに、獣肉をもっと身近なものとなるような商品が必要であることを把握できた。アンケート結果では、「ジャーキーをだしを使って、野菜をたっぷり入れたスープがおいしいと思う。」、「シーザーサラダのベーコンの代わりにジャーキーを使ってみては?」、「あぶってみたらもっと風味が良くなりそう。スープやお茶漬けのダシにしたらおいしそう。」など面白い提案を得ることができた。

3. 獣肉ジャーキーの食べ方

アンケート調査の結果にて有力な提案であった「獣肉ジャーキースープ」について、**獣肉ジャーキーの販売路拡大を目的として**ジャーキーの新たな食べ方の検討を行った。

◆ 獣肉ジャーキー商品化実現 (1月)

商品化の実現は、郡上地域の地域活性化のツールが誕生したことだけではなく、次のような意義がある。**学生とNPOの協働により、両者の可能性が広がったこと**である。学生は自信をつける契機となり、NPOにとっては、学生とコラボレーションすることで独創的なアイデアが深まることを知り、両者にとってwin-winの関係となった。本プロジェクトに携わった学生は、郡上の里山の問題について考えさせられ、持続的な里山の保全には猟師の仕事づくりが必要であることを把握し、草の根的な活動の一旦を担ったことを意識した。これらのことは、郡上地域の将来を憂う人が増えたという点で、意義深いことであって、今後、大学生が地域と関わる機会を持つことが重要だと感じられた。

◆ 道の駅「古今伝授の里やまと」における発売プロモーション (2月)

2012年2月25日、道の駅「古今伝授の里やまと」において、獣肉ジャーキー発売プロモーションが実施され、ボランティアスタッフとして学生2名が参加した。当日は、天候が優れないにも関わらず、多くの人が獣肉ジャーキー購買を目的として訪れていた。前日にメタ森がラジオやテレビによって情報発信をしていたことが影響したとみられる。また、岐阜新聞、中日新聞の記者が取材に訪れており、商品化されたことにより、より多くの人々へ獣肉を広めることが可能となったことを実感した。獣肉ジャーキーを通じて、人々が**獣害問題について考える機会が創出**されたのと同時に、**獣肉の有効活用によって猟師の所得向上に繋がるきっかけ**を創り出すことができたといえる。

◆ 学生フリーペーパー「GIFT」による情報発信 (4月)

1. フリーペーパー「GIFT」の概要

学生団体「岐阜県 (ぎふと)」は、岐阜県と学生がつながる場を創り出すフリーペーパー「GIFT」を発行する学生団体である。主に学生をターゲットとし、手配りでの配本を行っていることから市内の大学、短大、専門学校では有名な雑誌である。フリーペーパーを発行するために地域企業からの協賛を得る活動を行っており、地域企業や店舗において情報発信ツールとして活用されている。

2. 「GIFT」を用いた情報発信

2012年4月に発行された「GIFT」では、岐阜大学の講義内から生み出された「獣肉ジャーキー」の提案、その後、プロジェクトにより商品化が実現されたことが載された。「GIFT」を通じて、読者の様々な人々へ活動の主旨を情報発信することができ、本学の**学生が郡上地域の獣害問題を知るきっかけ**を作ることができた。

■ 今後の課題と展望

本プロジェクトは、「地域活性化システム論」講義内グループ演習において発案された「獣肉ジャーキーを岐阜ブランドとして商品化」を基に、その実現を「NPO 法人メタセコイアの森の仲間たち」と協働で目指してきた。その結果、「獣肉ジャーキー」が商品化され、郡上市に抱える獣害被害、猟師の高齢化などの問題を情報発信するツールとして、有効なものもできた。しかし、私たちの目的は「獣肉ジャーキー」を商品化することではない。私たちは郡上の諸問題を解決するための第1ステップを踏み出したに過ぎない。猟期は11月15日から2月15日と定められており、猟期以外は無害駆除としてのみ捕獲が認められている。このことから安定した獣肉の供給は難しく、大量生産できない課題がある。また、猟師の高齢化は進んでおり、若年層の猟師の増加が望まれている。そのためには、広報活動を実践していく必要がある。

持続的に里山を保全していくためには、猟師の存在が不可欠である。「獣肉ジャーキー」を活用した情報発信を継続し、猟師の存在意義を広くPRするとともに、獣肉の生産、流通、サービスの流れを確立することによって猟師の仕事を作ることが猟師人口の減少に歯止めをかけることに繋がると考えている。猟師の所得の増加のために「獣肉ジャーキー」を今後より多くの人に広めていく役割が私たちにある。獣肉を食べることが里山保全につながることを広くPRすることで、猟師の仕事づくりに貢献したいと考えている。



ミーティングの様子



岐阜大祭での試食会 獣肉ジャーキーにおける食べ方の検討



商品化された獣肉ジャーキー



発売プロモーションの様子



「GIFT」にて掲載されたようす



堪能したBarで。



もっと様々な場所で獣肉が見られるように...